



幼稚園生活と最初の學校生活

東京女子高等
師範學校訓導

山 内 俊 次

近來我が國幼稚園の發達は、著しいものがあり、爲めに大正十五年四月には、幼稚園令の改正を見るに至つたのであります。斯道のため、誠に慶賀すべきことであります。

然るに、それと同時に、文部省令第九號として公にされた幼稚園令及幼稚園令施行規則制定の要旨竝に施行上の注意事項を見るに及んで、聊か私共の意に見たない點があるのであります。それは外てもありません。ここに抄録して見ると次のやうな所なのであります。

「兒童ノ心身ヲ健全ニ發達セシメ、善良ナル性情ヲ涵養セムトスルニハ幼時ヨリ之ニ着手スルヲ以テ優レリトス。コレ家庭教育を禱補スヘキ幼稚園施設ノ必要アル所以ナリ。殊ニ社會生活日ニ複雑ヲ加ヘ、一家ノ事情、意ヲ子女ノ教養ニ専ラニスルコト能ハサル者漸ク多カラムトスル今日ニ在リテハ、幼稚園ノ任務ハ益々重要ノ度ヲ加ヘサルヲ得ズ。幼稚園ノ設置ハ、固ヨリ之ヲ任意トシ、市町村、市

町村組合、町村學校組合又ハ私人ヲシテ必要ニ應ジテ之ヲ設置スルヲ得シムト雖、父母共ニ勞働ニ從事シ、子女ニ對シテ家庭教育ヲ行フコト困難ナル者ノ多數住居セル地域ニ在リテハ、幼稚園ノ必要殊ニ痛切ナルモノアリ、今後幼稚園ハ此ノ如キ方面ニ普及發達セムコトヲ期セザルベカラズ。隨ツテ其ノ保育ノ時間ノ如キハ、早朝ヨリ夕刻ニ及ブモ亦可ナリト認ム。又幼稚園ニ入園セシムベキ幼兒ノ年齢ニ就キテハ、從來ノ規定ト同ジク三歳ヨリ、尋常小學就學ノ始期ニ達スルマデヲ原則トスルモ、特別ノ事情アル場合ニ於テハ三歳未滿ノ幼兒ヲモ入園セシメ得ルコトトセリ。之ヲ外國ノ實例ニ徴スルニ、幼稚園ニ孩兒預所ヲ附設スルモノ尠カラズ、爲メニ特別ノ事情アル家庭ニ對シ便益ヲ與フル所頗ル大ナルモノアルガ如シ云々

之によつて之を見るとき、幼稚園の目的として擧げてあることは、何れも、家庭教育といふものが何處までも重になつて行くべきもので、幼稚園は、それを裨補すべきものであると見てゐる様であります。之は當然それによからうと思ひます。けれども、その次に於て、「殊に社會生活日に複雑を加へ、一家の事情、意を子女の教養に専らにすること能はざる者漸く多からんとする今日に至りては云々」中頃の「父母共に勞働につき云々」又終りの方の「幼稚園に孩兒預所設置云々」等を通じて見ると、幼稚園の任務が、まるで職業婦人若くは貧困者のために其の重要さを認めねばならぬやうな感じがいたします。これが先に私共の意に滿たない所があるといつた所以であります。

なるほど、幼稚園が社會的に、かうした方面に大いに必要であると思ひます。けれども幼稚園の任務をそればかりとは考たくない。少くともそれが主要な任務であるとは考へたくないと思ひます。即ち學齡以前の子女の教育といふものは、家庭に於て親が之に當るといふことは、理論上當然のこととは思ひますが、両親が職業上幼兒の教育に支障ないとしても、乃至は良家の子女であつて、家庭の設備が幼稚園以上であるとしても、家庭の事情は、子女の學齡以前の教養に必ずしも完全であるとは限らないと思ひます。故に、幼稚園が家庭教育を裨補すべきものといつても、それは決して職業のため、両親共子女の教養を顧みる餘裕がないといふ場合のみに限らないのであります。子女の學齡以前の教養のため全力を擧げ得る家庭に於ても尙且つ幼稚園の必要が存在すると考へたいのであります。即ち學齡以前の子女の教養をよりよくせんためには家庭教育のみでは不充分であつて、家庭生活と學校生活との中間に幼稚園生活といふものの價値を大いに認めたいと思ふのであります。この方面のことにいささかも言及してゐないことを、私共は不満と思ふのであります。

二

抑々家庭生活から學校生活への變化は、幼兒にとつては、餘程重大な變化でなくてはなりません。この重大な變化をして出來得る限り圓滑ならしめることは、學校生活の第一歩として私共の最も意を用ひねばならぬことだと思ひます。その圓滑を缺く場合、茲に幼兒の精神的、若しくは身體的に何等かの故

障の原因が醸される場合が多いのであります。

家庭生活から學校生活への變化とは、要するに家庭生活から、團體的生活への變化を意味するものであります。之が人の社會的生活への第一歩であつて、相當意義ある、慶賀すべき事柄であると思ひます。又一面から見る時は放縱の生活から、規則的生活への變化であるともいへませう。放縱といふのは少し語弊があるかも知れませんが、幾分不規則な生活といふ方が妥當とも思ひます。兎も角も之等のことは、幼兒にとつては、誠に重大な變化であります。

然るに、ここに幼稚園生活といふものは、丁度不規則な家庭生活と、規則的な學校生活との中間にあつてその過渡期をなす好個の生活であると見ることがあります。多數等しい年齢のもの集合であることは學校生活のその如く、而してあまり規則的な課業のないことは家庭生活の延長の感があるなど全く、字の通りの中間の生活であります。私共の幼稚園生活の價値を認むる所は、此處なのであります。して見れば、如何に良家の子女と雖も、又家庭に於て子女教養の暇を職業上持つことの出来ない場合と雖も等しく幼稚園の必要は認めざるを得ないのであります。その上に職業婦人は子女の教養のために生活の不安を誘致する恐れなく、一舉兩徳とは、このことだと思ふのであります。

これ先に、如何に家庭教育に努力してもまだ充分といことが出来ないものがあると主張した所以であります。家庭生活では到底期待し得ない或るものが幼稚園生活に於ては容易に得らるべき性質のことが

多々あるのであります。そしてこれがやがて學校生活への變化の圓滑を期する所以であると思ふのであります。

三

本年の第二部第一學年兒童は、二十四名中家庭生活から直ちに學校生活へ這入つたものが六名あります。これを尙詳細にいへば男十二名中、三名及び女十二名中三名、都合六名となるわけであります。その他のもの十八名は、何れも一箇年若くは二箇年、夫々の幼稚園生活を經驗したものであります。

この兩者の入學當初の様子を比較すると、明に區別がつくのであります。幼稚園生活をしたものは何れも初めから元氣がよくて、晴れ／＼してゐるに反し、然らざるものは何となく不安な様子で、まるで萎縮してゐる。然るに二週間ばかり日が経つと、漸く學校の様子がわかつて來て、今まで萎縮勝ちであつたものが、急に野性を發揮して人を押しつけ、人より先んじ、利己的行動に出づるといふ様な例が屢々認められる。そして幼稚園生活をして來たものは、そこに一年なり二年なりの團體的生活といふものが、自然に他人との協調性を培養して來てゐる關係上、學校になれたがために、困惑する様な變化を認めるといふことは少ない様であります。

幼稚園生活から來たものは、言語的習練が甚だよく出來てゐるため發表方面に於て何等の慮する所を見ない。然るに家庭生活から來たものはこれが不充分であるために教師に氣づかひ朋輩に氣づかひ、黙

々として、遂に立小便といふ様な甚だ困つた結果を招致し易いのであります。

由來幼兒の自然の有様といふものは、何か感受からの刺戟に遭へば、それに對して何等かの反應があるべきであります。言換ふれば、何等かの行動に出づべきであります。何を見ても聞いても黙々としてゐるといふことは甚だ不自然のことの様に思ひます。

然るに家庭生活から直ちに學校生活に這入つたものの中にはよくかうした不自然の現象を見受けることがあります。追々學校生活になれて來次第、自然なほるものとはいひながら、いかに短時日でもさうした不自然な生活を續けしめてゐるといふことは、如何にも氣の毒であります。そこへ行くと幼稚園生活をして來たものにはさうしたものは、殆んど見ないのであります。

此の如きことは一般的事として、特殊な例外は勿論あり得るのであります。又幼稚園生活をしたものが必ずしも理想的に社會性の淘汰が出來てゐるとは限りません。けれども一般的には大要右の如きことが認められると思ひます。

四

次で少しく具體的のことについて述べて見ることにいたします。本年四月家庭生活から直ちに學校生活に這入つた男兒がおります。或月曜日に、前日の日曜日の經驗發表といふことを順次クラス全體の兒童の前に出て言語によつて發表せしめたのであります。勿論度々やつてゐることなので、多くの兒童は

平気で發表します。然るにその兒童は自己の番になつたので椅子から立つは立つたが、その兩手を机の裏面へ着けたまゝ半立ちとなり、出るかと思ふと急に「ア、イターイ」といひ出したのです。そして机上に顔をすりつけて、椅子から立つは立つてゐるが、兩手は机の裏へ入れて、恰も手指でも挿まれた恰好なのです。多くの兒童は驚きました。私もいささか驚きました。その隣席が、矢張り幼稚園生活のない兒童で、この有様にポンヤリしてゐる。然るに幼稚園から來たものは、「どうしたの？君」といつて親しく手を肩にかけて慰める。すると、「イターイ」と叫んだ兒童は「もう手が机にくつついちゃつた。お醫者様が來ても、だれが來てももうはなれない」といふ様なことを大聲獨語してゐる。この様子を見てあやしんで觀察すると、決していたくも何ともないが、ただ、立つて大勢の前で話することを止めるため、トツサの氣轉でかうした虚偽をしたのであります。實に馬鹿氣たことながら、かうした事實があつたのであります。

この祖母が、入學當初毎日附添ひて來てゐて、兒童を幼稚園に出さなかつたからといふことを頻りに辯解してゐました。

「兄は〇〇幼稚園で二箇年保育を受けましたが、何等得る所はなかつた様です。こんなことなら幼稚園などへやらなくても家庭で教へた方が効果があると考へましたので、二男の方は家族相談の結果で幼稚園へは出しませんでした。……家庭がそんな考へてゐるから兒童こそいい迷惑であると思ひます。一

體「教へる」とは何のことか、甚だ奇怪なことで、幼稚園の任務も何もわかつてゐないらしい。この家庭にこの子ありといふことが、いはれると思ひます。

虚偽といへば、かういふ例もあります。矢張り幼稚園生活といふものが、面白くないといふ両親の意見の下に、家庭で嚴格にしつけをしたと稱する一男兒が、矢張り入學當初、學校より書付けを家庭へ届けるため、持ち歸らしめたのであります。ところが途中紛失してしまつたのです。翌日返信を何れの兒童も提出するのに自分丈けないので、はじめて紛失を氣づき、私の所へ来て、次のやうにいふのです。

「先生、きのふ、電車の中でどつかの人が来て、僕のもつてゐた書付を見せろといふから、見せたらその人がどつかへもつていつてしまひました。」

甚だ不思議に思つて色々さぐつて見ると、全くそれは虚偽で紛失したことがわかつたのです。家庭のしつけ方はどうかと思つて色々調べて見ると、父親が某校の漢文の教師で非常な嚴格な教育を施してゐることがわかつたのであります。即ち全く幼兒の世界を無視した教育といつても過言でない様なことが、遂ひには虚偽をなさしむべく仕向けて來たものだと私共は觀察してゐます。よく家庭とも談合して家庭を教育してやつたのであります。これが、最初幼稚園といふものの保育を排し、家庭教育を大いに主張してゐたのだから驚くより外ないと思ふのであります。

尙一女兒について申しますと、これは入學前無理に文字の読み書き、抽象數の取扱といふものを家庭

に於て両親が無理に教へてゐたものらしいのです。長女のことだから入學前一、二年の間専心そんなことにとつとめたらしいのです。ために入學當初文章の讀解文字による思想の記述など、異常な程度まで進んでゐました。然るに、何度も何度も教へても、自己の學ぶべき場所がわからないのです。學校へ來ても教場の位置がとんと見當がつかぬ。整列の時前から三人目といふことを身長順で定めておいても、どうしても自分の場所の見當がつかないのです。凡そ一ヶ月以上もそんな状態であつたのですが、これは、家庭生活から學校生活へ直ちに這入つた兒童について特殊なものゝの實狀を正に代表したものだといふことが出來ます。入學期異常な進歩を示すことそれが決して悪いといふわけではない。又整列する順がいつまでもわからなくても、新入兒童のため著しく差支があるといふのではありません。一方に於て異常の進歩を見るのに、一方に甚だしい缺陷があるといふ偏した家庭教育の弊を排したのであります。

五

之を要するに幼稚園生活といふものの學校生活に對する精神的效果といふものは、實に重大な意義を有つものだと思ひます。然るに世には、小學校教育の實際に多年携はつてゐながら、幼稚園から入學した兒童より家庭から來た兒童の方がよいといふ様な、全く幼稚園生活を否定する様な言辭を弄することは、誠にいはれないことだと思ひます。勿論幼稚園の質にもよることであらうとは思ひますが、一般的には甚だいはれない言辭であります。少くとも、家庭生活と學校生活との過渡期を幼稚園生活によることは最も合理的に幼兒の生活の發展を期することが出来る所以だと信ずるのであります。(丁)